

「箱」がある道

—人とまち、人と道が関わるしかけ—

登場人物

ハコ?



僕



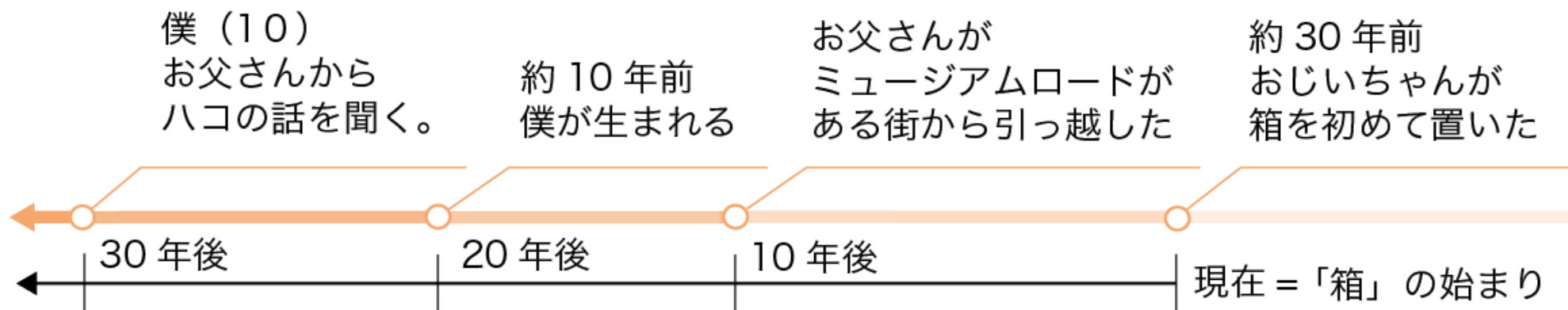
お父さん



おじいちゃん

箱!

時系列



疲れたー。

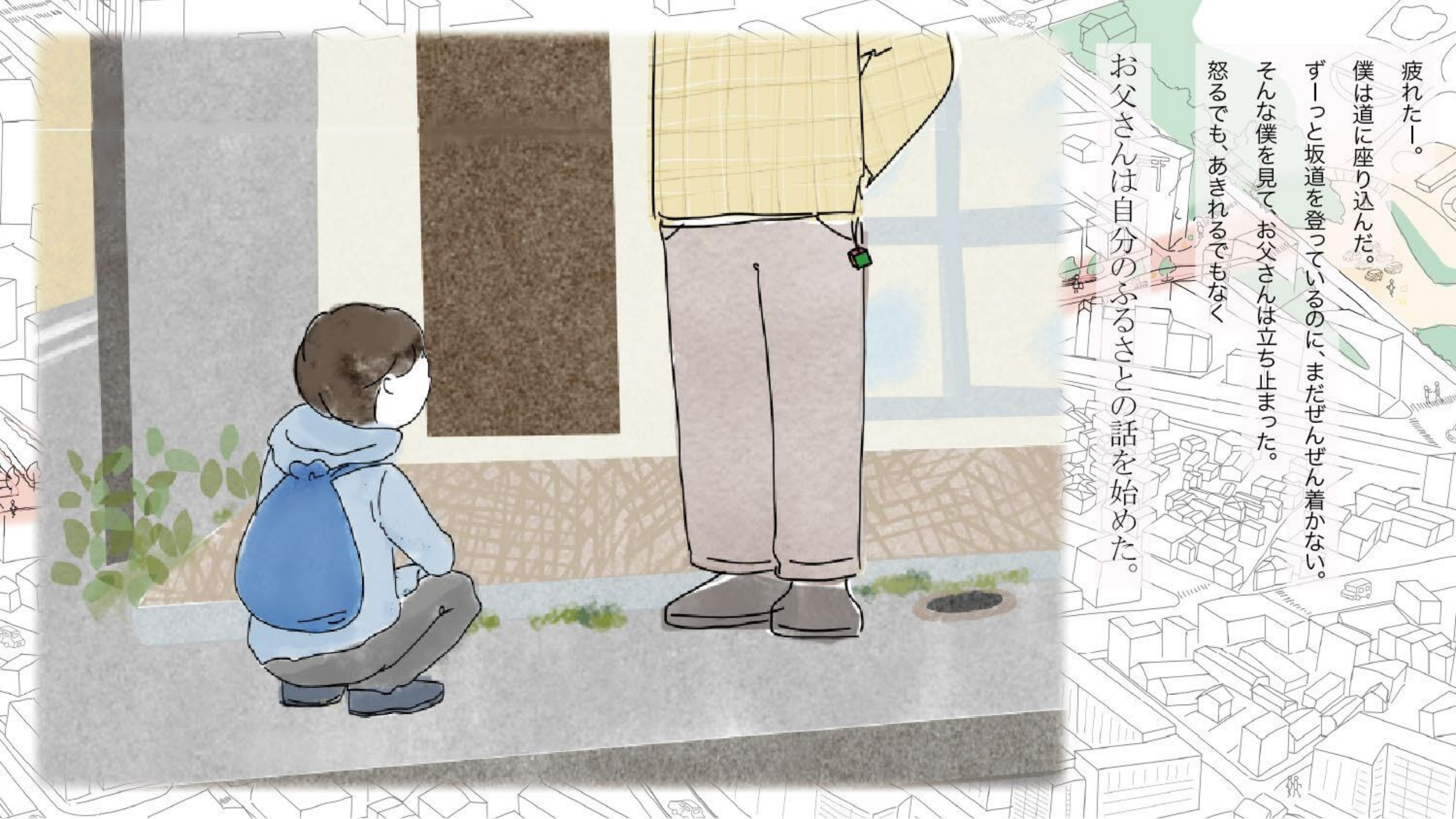
僕は道に座り込んだ。

ずーっと坂道を登っているのに、まだぜんぜん着かない。

そんな僕を見て、お父さんは立ち止まった。

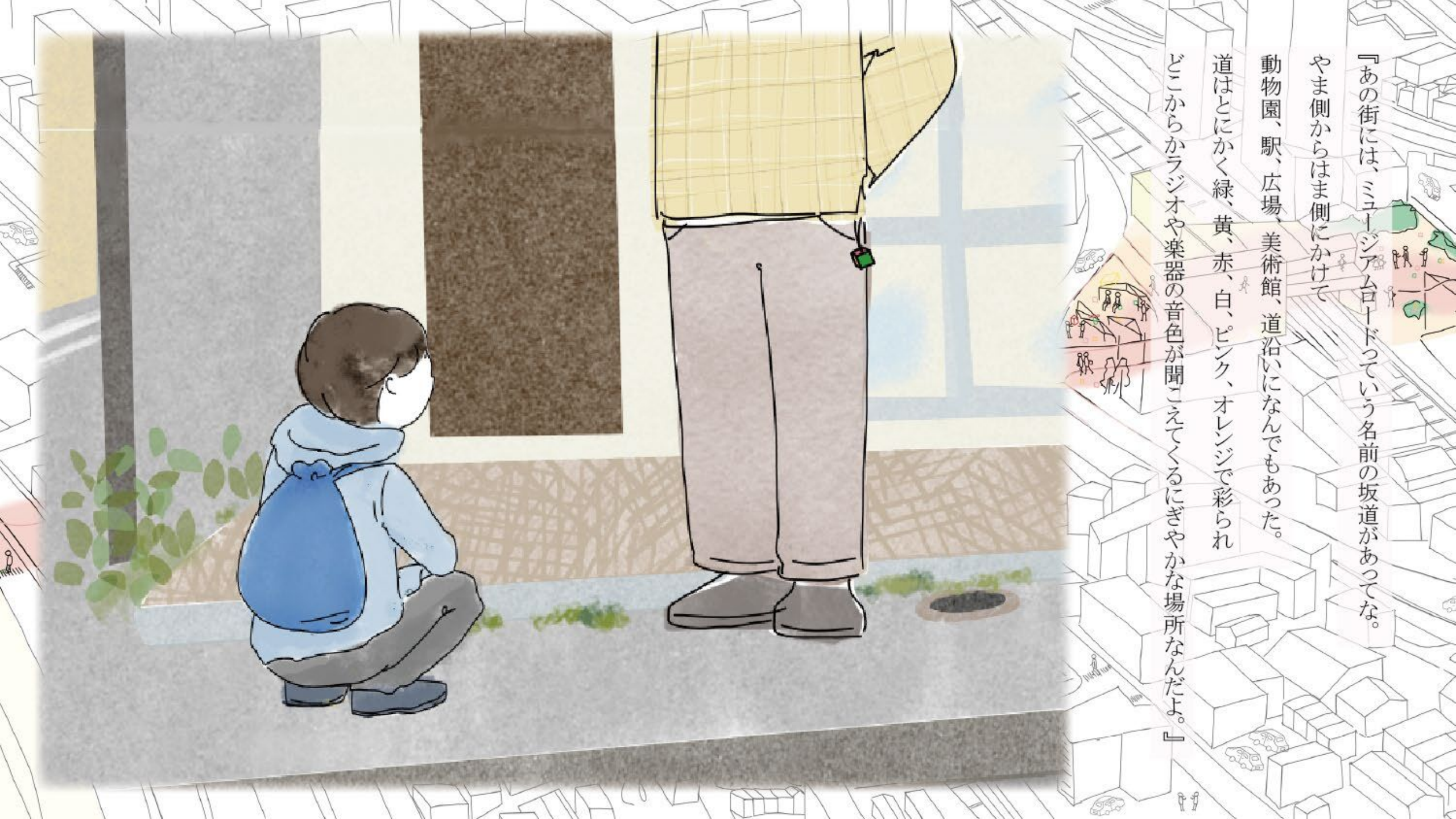
怒るでも、あきれでもなく

お父さんは自分のふるさとの話を始めた。





僕が生まれる前に、お父さんが住んでいた町には
そこら中にハコがあって
今みたいに疲れたときはハコに座って休むんだと。



『あの街には、ミュージアムロードっていう名前の坂道があつてな。
やま側からはま側にかけて

動物園、駅、広場、美術館、道沿いになんでもあつた。

道はとにかく緑、黄、赤、白、ピンク、オレンジで彩られ

どこからかラジオや楽器の音色が聞こえてくるにぎやかな場所なんだよ。』



『小学5年生になったとき、初めて「箱」を作る
ことになった。

緑、黄、赤、白、ピンク、オレンジ、...

色の組み合わせやカタチを悩みに悩んで

自分だけの「箱」を作り上げたのを

今でも覚えている。

作った「箱」は、みんなで道に置きにいった。

さみしいような気もするけど

そういう決まりだったんだ。』



『ある時から

知らないうちに、まちの大人が

「箱」の修理をしてくれていたことに気づいた。

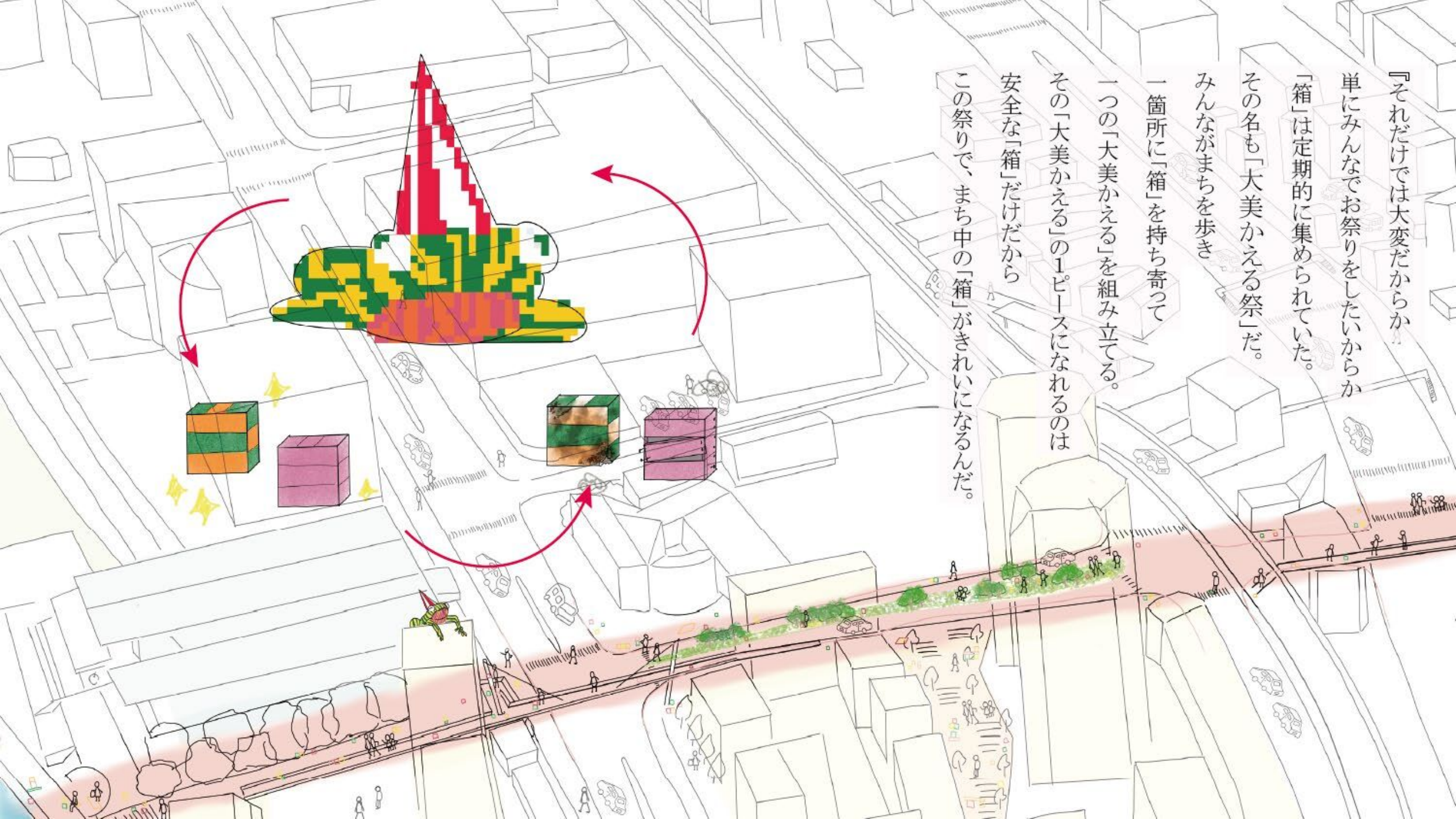
釘が出たり古くなったりしたものを

直すおじさんを何回か見かけたことがある。』





『そのころには、道が少しずつ変わっていて
広くなった歩道で
「箱」を並べてみんなで集まって
直したりすることだってできた。
みんなお気に入りの「箱」や使い方もあって
だんだん道が自分たちのものになっていく
感覚があったんだ。』



『それだけでは大変だからか』

単にみんなでお祭りをしたいからか

「箱」は定期的を集められていた。

その名も「大美かえる祭」だ。

みんながまちを歩き

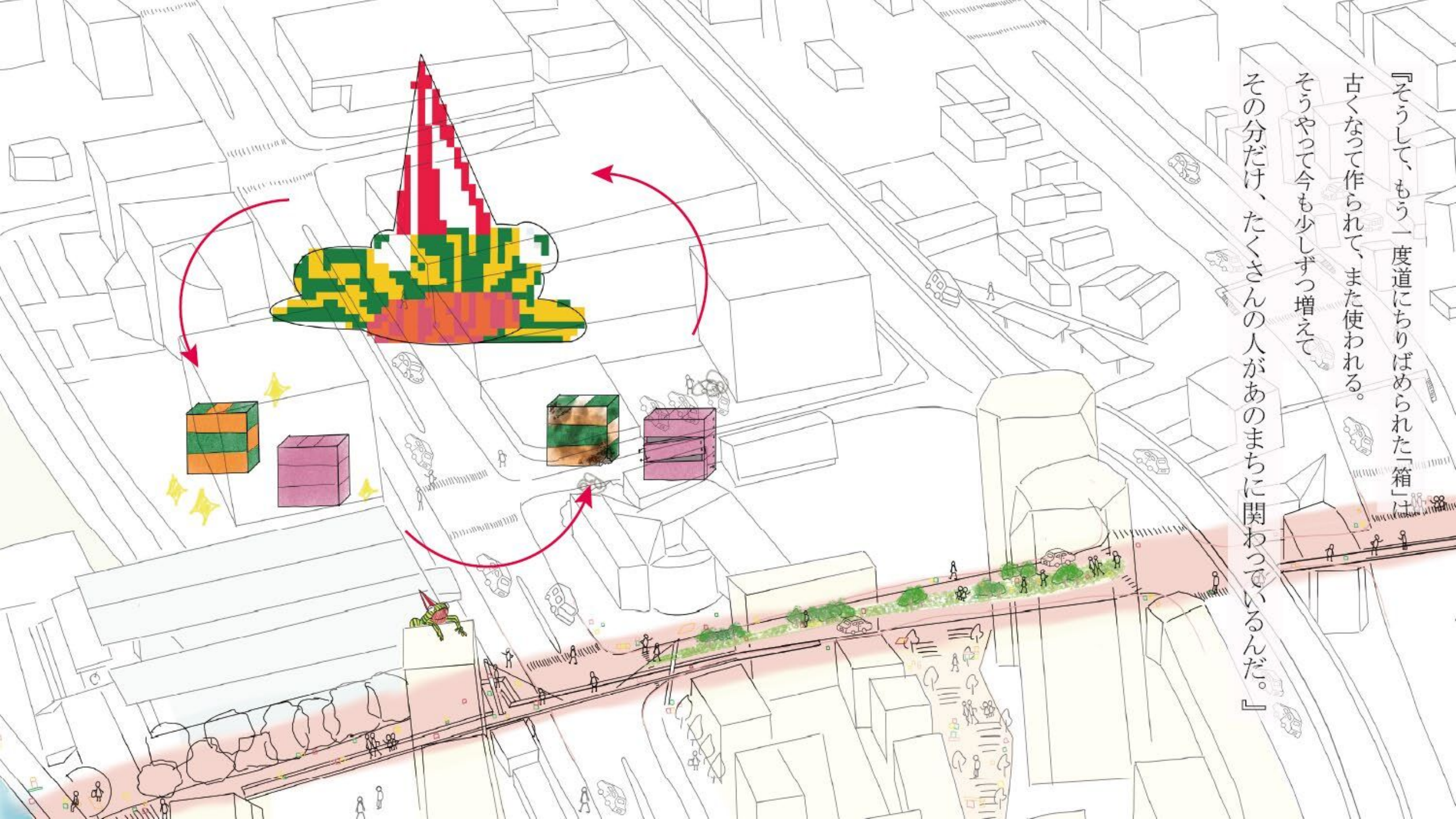
一箇所に「箱」を持ち寄って

一つの「大美かえる」を組み立てる。

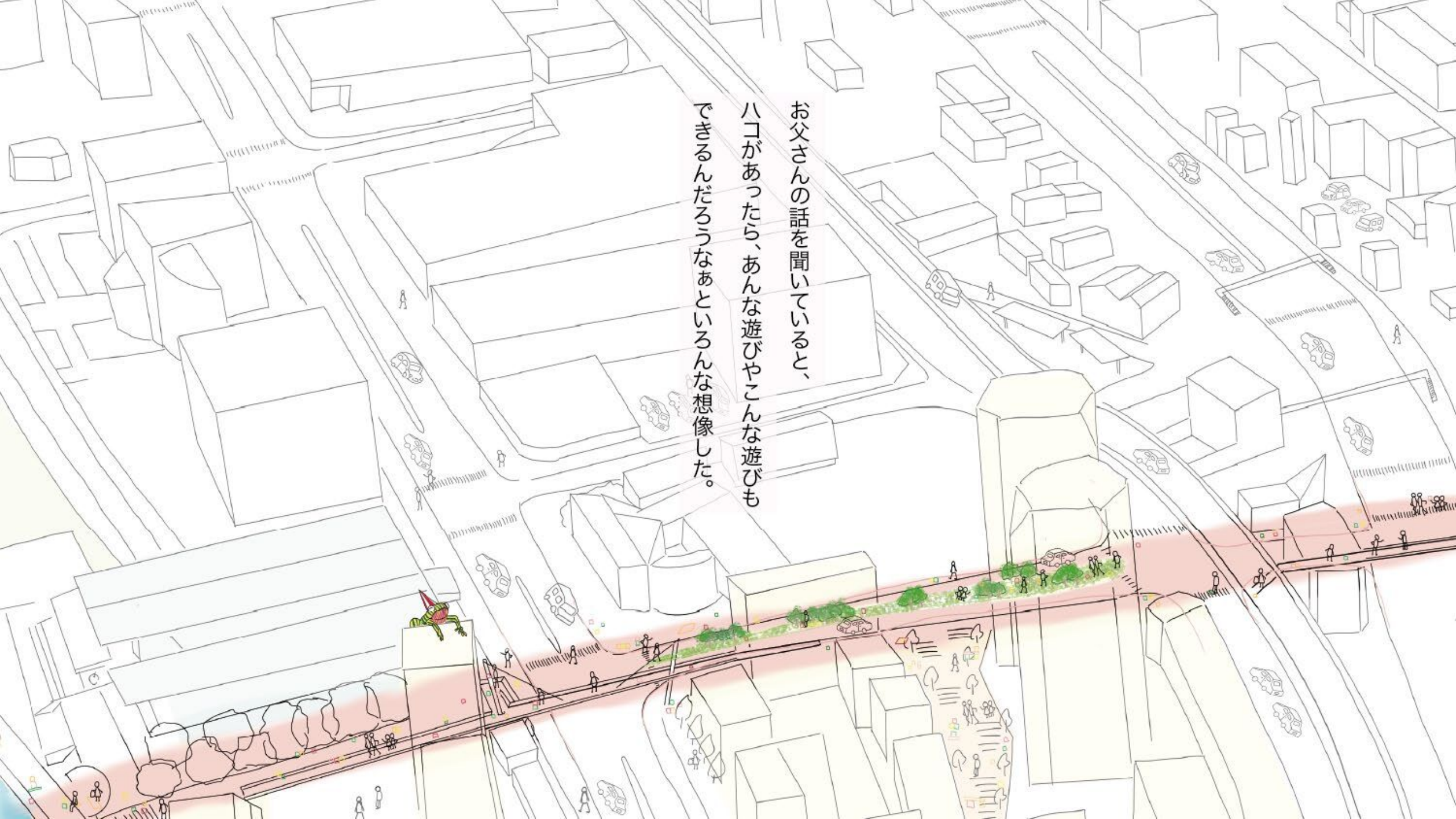
その「大美かえる」の1ピースになれるのは

安全な「箱」だけだから

この祭りで、まち中の「箱」がきれいになるんだ。

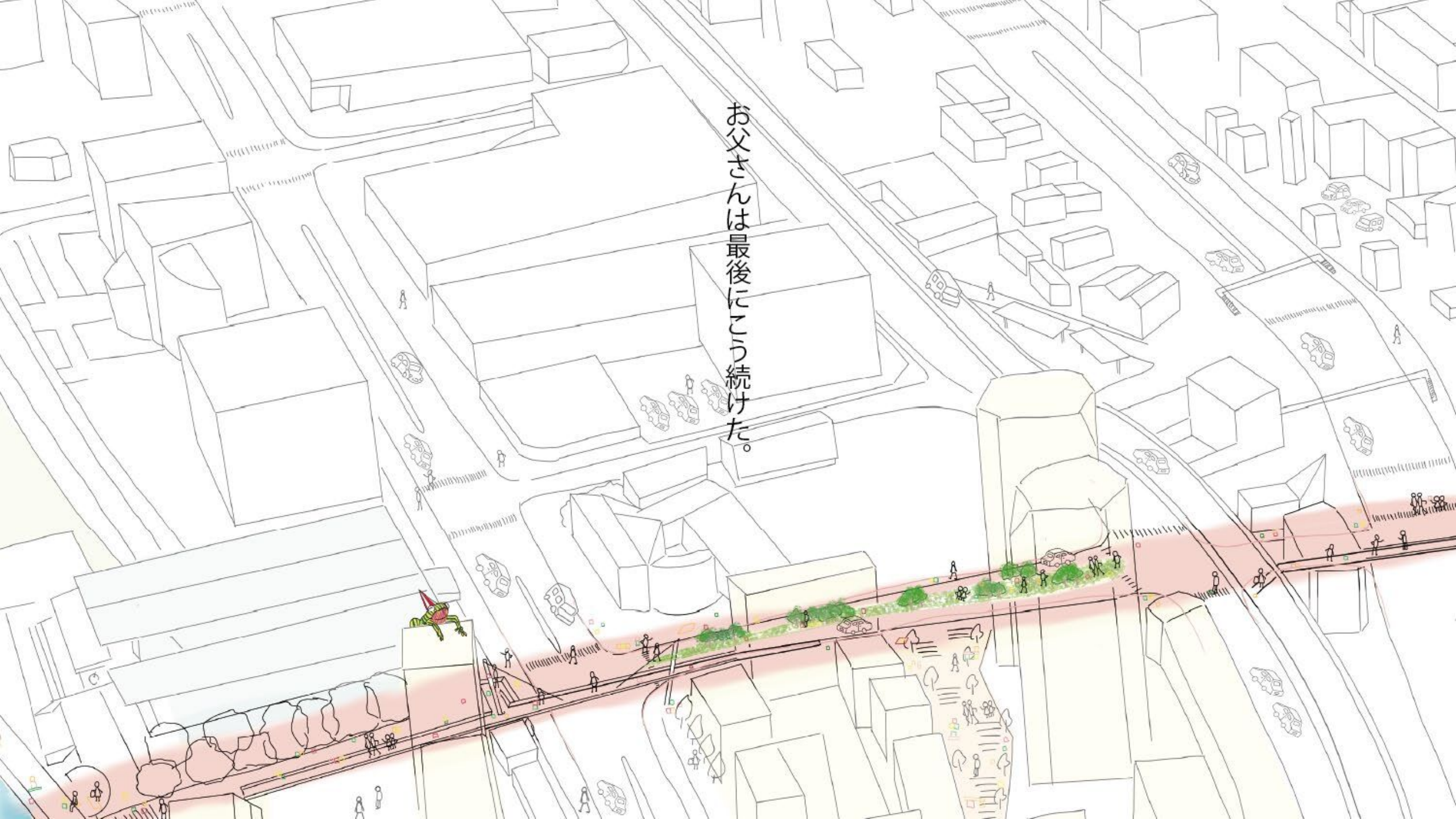


『そうして、もう一度道にちりばめられた「箱」は古くなって作られて、また使われる。そうやって今も少しずつ増えてその分だけ、たくさんの方があのまちに関わっているんだ。』

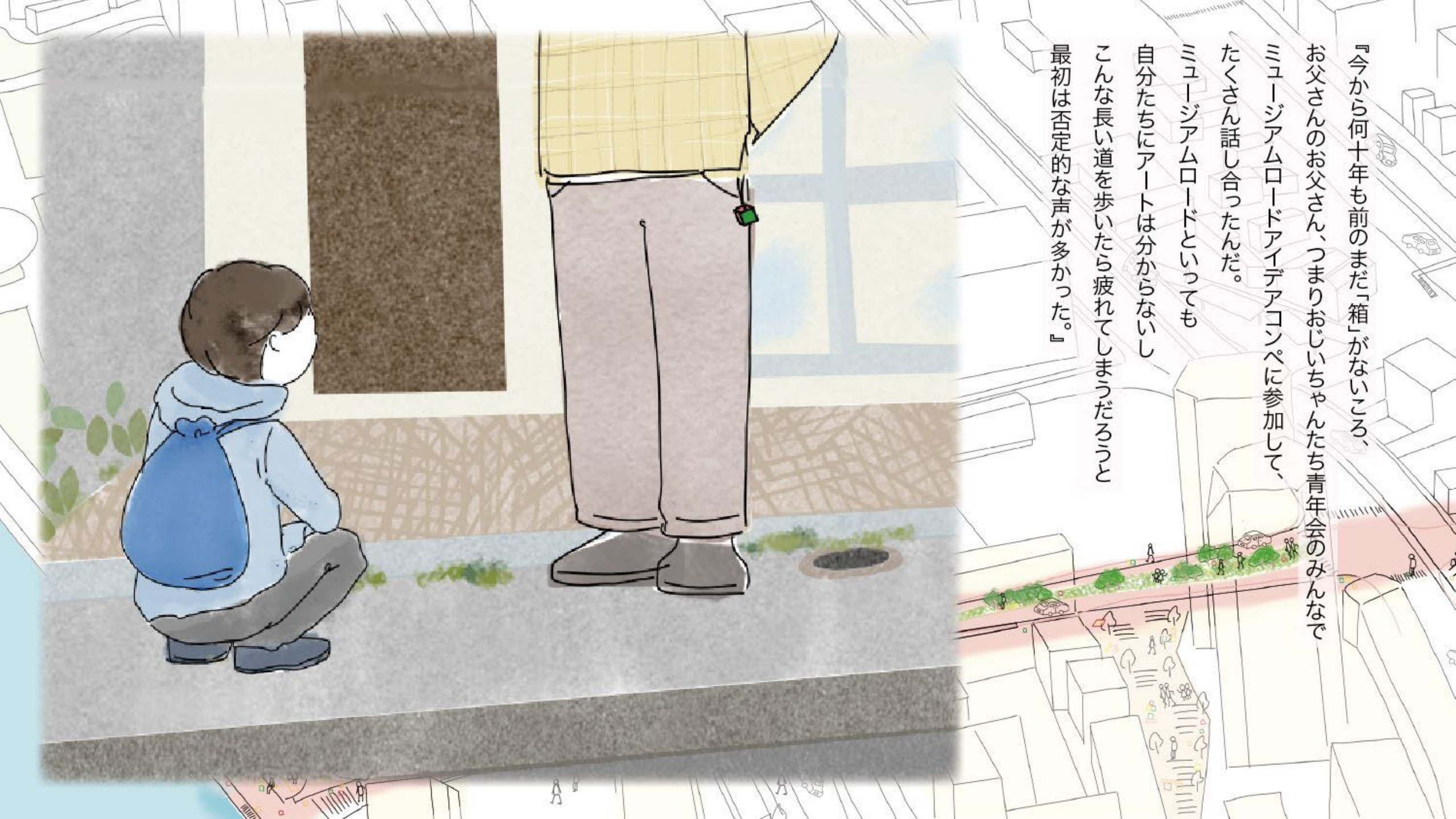


お父さんの話を聞いていると、
ハコがあったら、あんな遊びやこんな遊びも
できるんだろうなあといろんな想像した。

お父さんは最後にこう続けた。



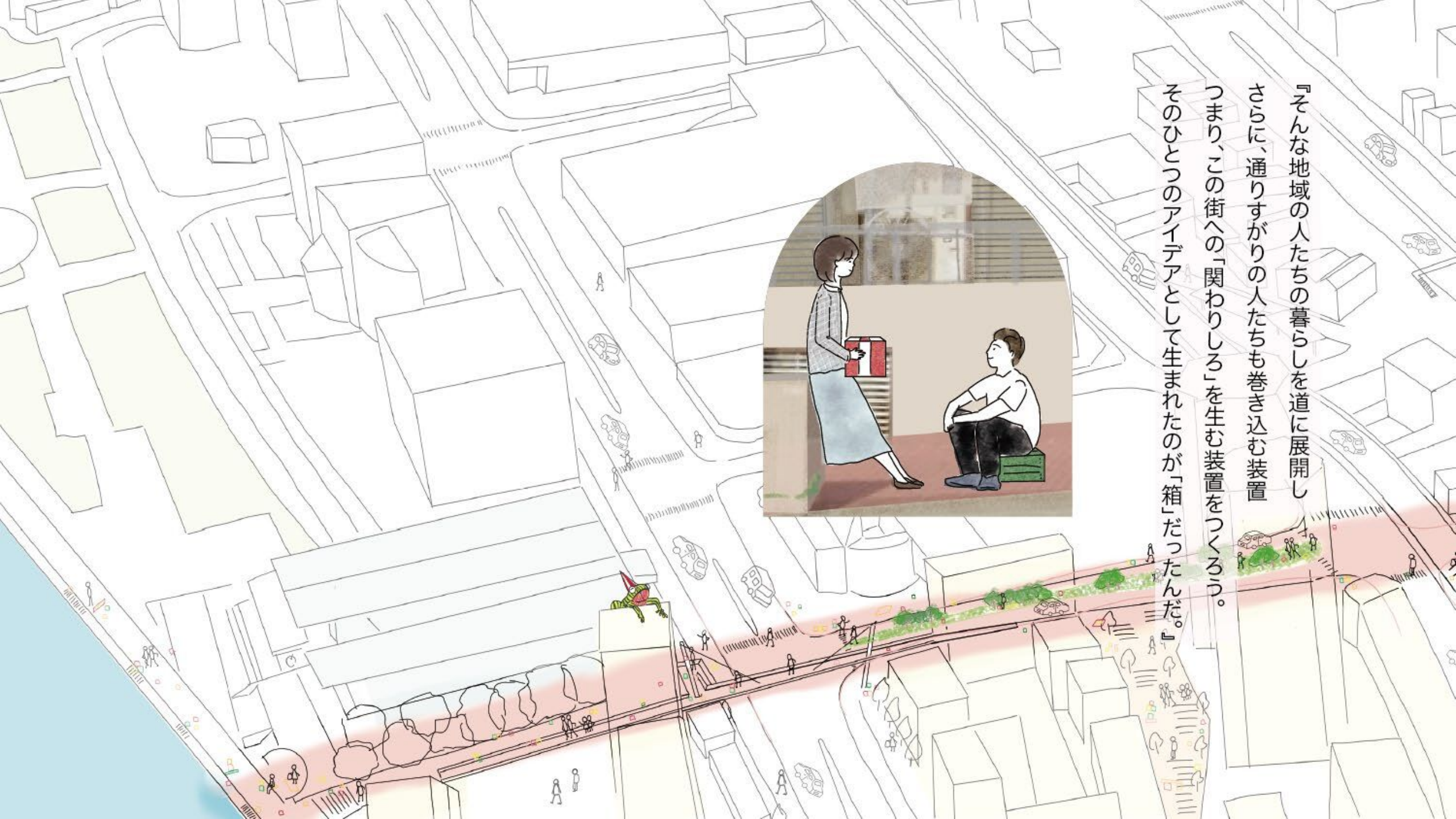
『今から何十年も前のまだ「箱」がないころ、
お父さんのお父さん、つまりおじいちゃんたち青年会のみんなで、
ミュージアムロードアイデアコンペに参加して、
たくさん話し合ったんだ。
ミュージアムロードといっても
自分たちにアートは分からないし
こんな長い道を歩いたら疲れてしまうだろうと
最初は否定的な声が多かった。』



『でもだんだん、アートを「自分たちごと」として考えることも
できるんじゃないかって意見が出てきた。
アートは誰かが決めるものでもないし、作者がいなくてもいい。
自分たちの暮らした文化、その営みが道に表れた風景
それもこの場所にしかないアートだろうって。』



『そんな地域の人たちの暮らしを道に展開し
さらに、通りすがりの人たちも巻き込む装置
つまり、この街への「関わりしろ」を生む装置をつくらう。



『そんな地域の人たちの暮らしを道に展開し
さらに、通りすがりの人たちも巻き込む装置
つまり、この街への「関わりしろ」を生む装置をつくらう。

そのひとつのアイデアとして生まれたのが「箱」だったんだ。』



『そんな地域の人たちの暮らしを道に展開し
さらに、通りすがりの人たちも巻き込む装置
つまり、この街への「関わりしろ」を生む装置をつくらう。

そのひとつのアイデアとして生まれたのが「箱」だったんだ。』





01 | ミュージアムロードを歩く



02 | 公園に置かれた箱



03 | 作る、使う、かえる

使うとき同様、作る時もルールは最小限！

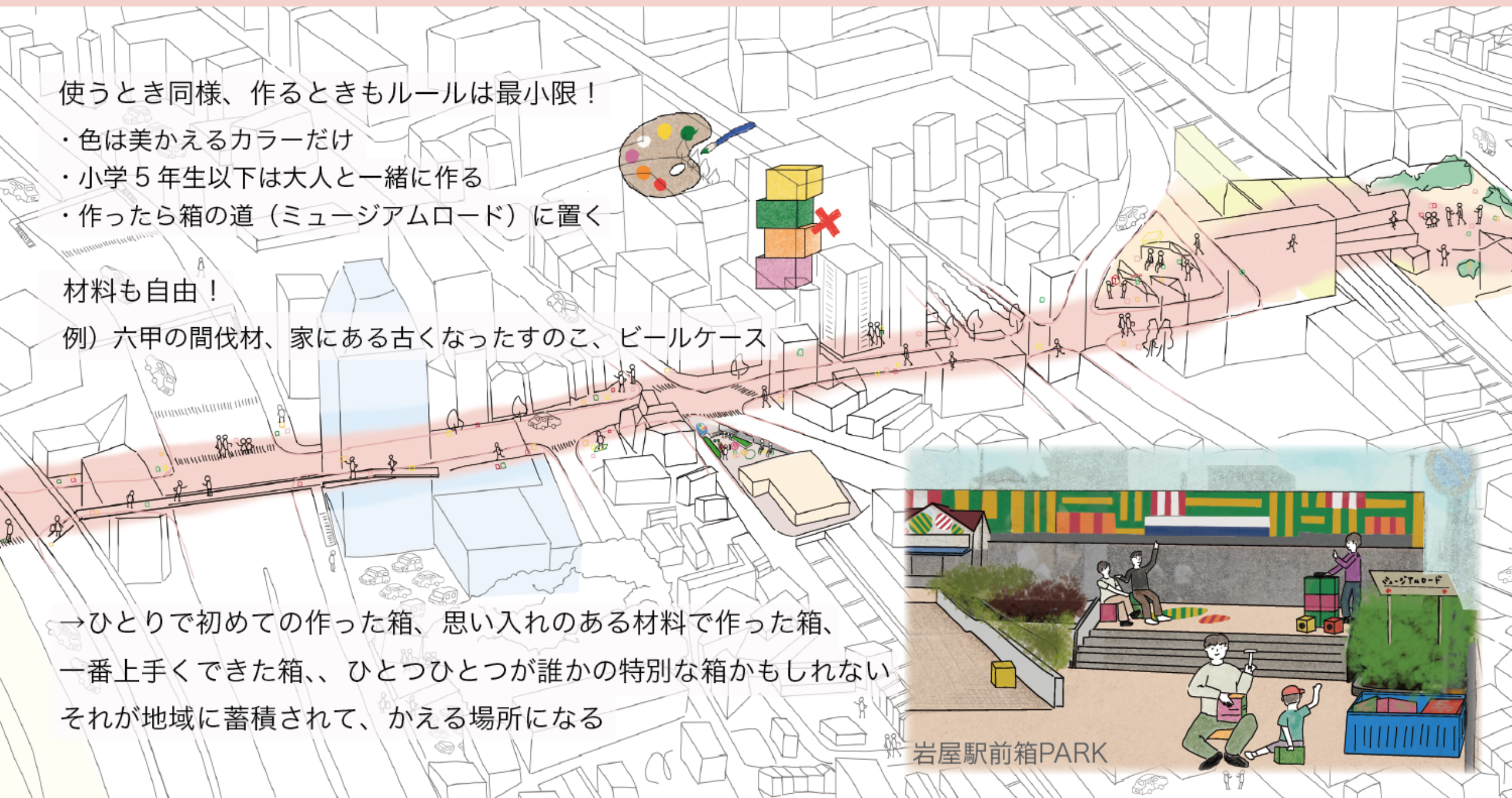
- ・色は美かえるカラーだけ
- ・小学5年生以下は大人と一緒に作る
- ・作ったら箱の道（ミュージアムロード）に置く

材料も自由！

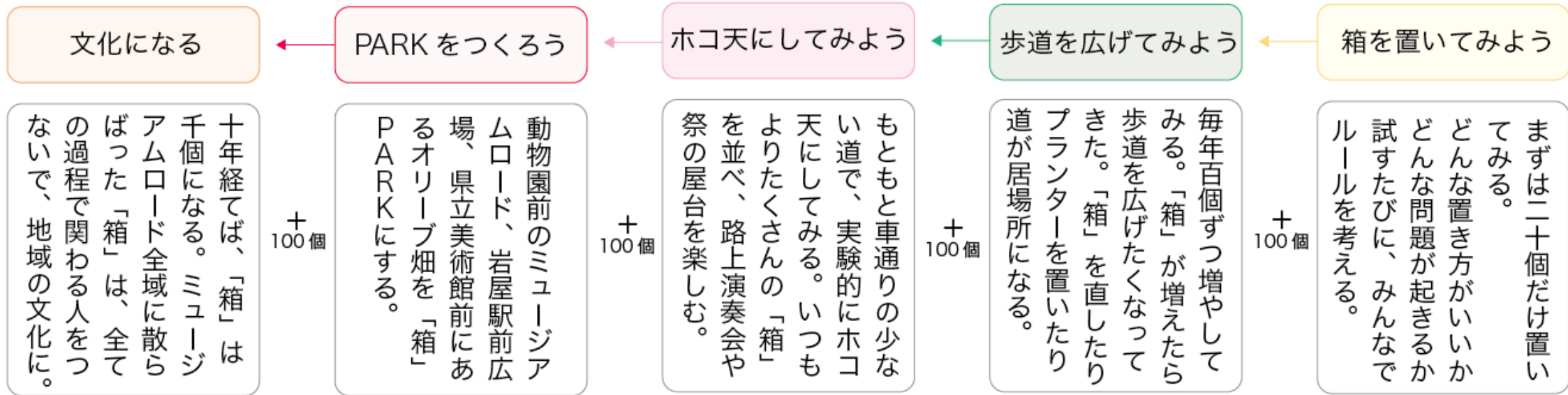
例) 六甲の間伐材、家にある古くなったすのこ、ビールケース

→ひとりで初めての作った箱、思い出のある材料で作った箱、一番上手くできた箱、ひとつひとつが誰かの特別な箱かもしれないそれが地域に蓄積されて、かえる場所になる

岩屋駅前箱PARK



04 | 増える箱、広がる道の賑わい



ミュージアムロードを育てるためのロードマップ

「箱」辞典

・「箱」
座つたり机にしたり、
使い方は無限大。

・平たい「箱」
寝そべったり、上に乗って
自分だけのステージに。

・スピーカー「箱」
見た目はただの箱だけど、
空いた穴からラジオや
音楽が聞こえてくる。

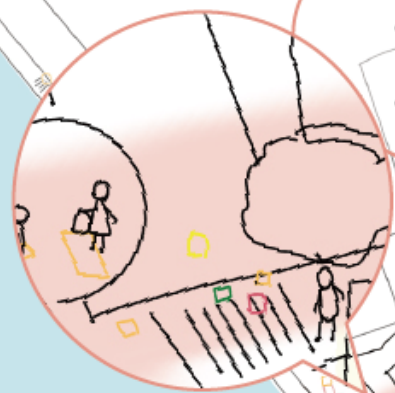
・プランター「箱」
蓋がなくて、ちょうどいい
隙間があった箱はプランターにび
つたり。

・コンポスト「箱」
落ち葉やちよつとしたごみも、こ
こに集めれば肥料に。

・ななめ「箱」
坂道でも座りやすい、
地面にくっついた箱。

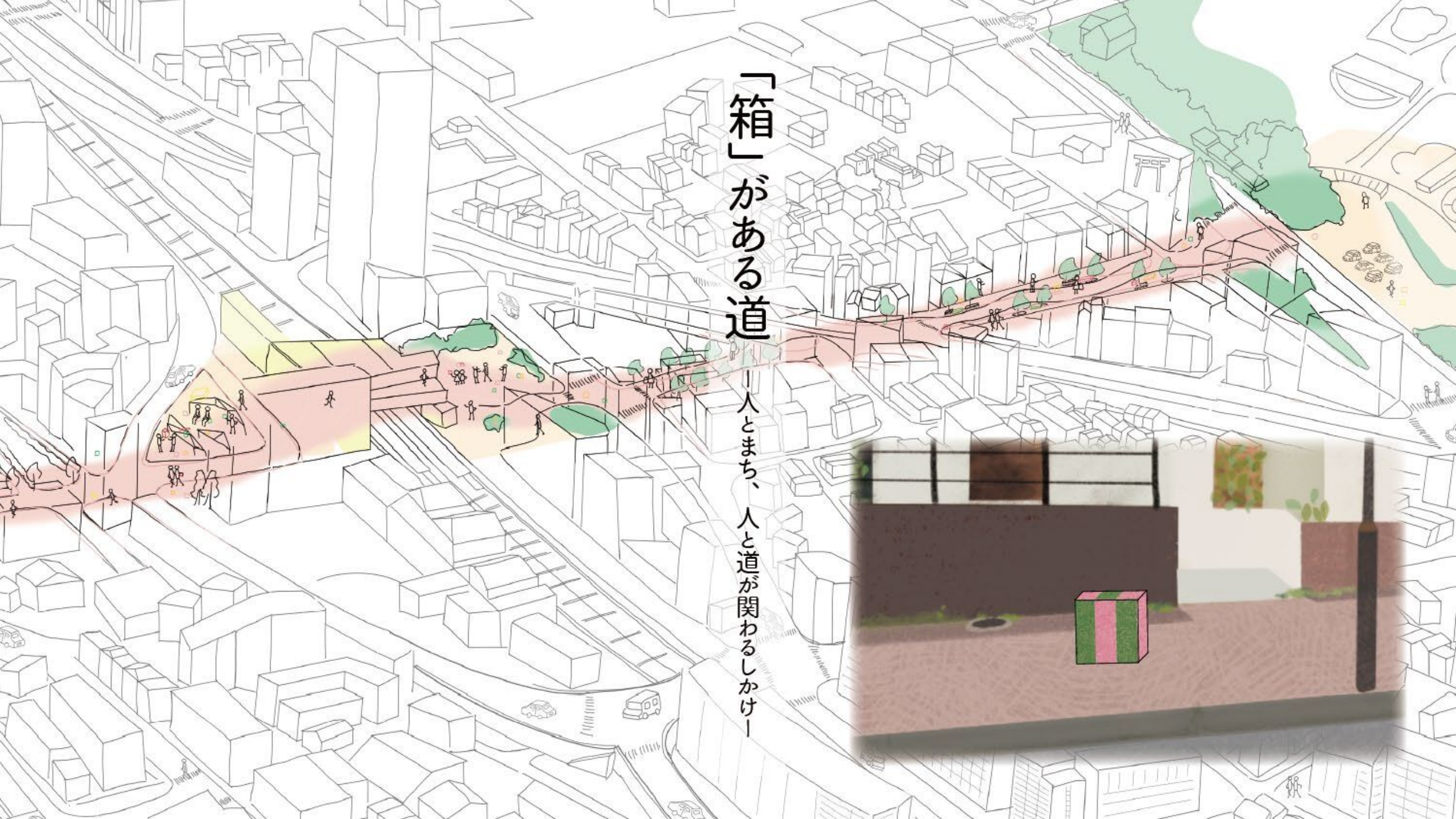
・ふたなし「箱」
おもちゃ箱や、入れ物が欲しい買
い物帰りにも。

- ・ミュージアムロードの道標
- ・関わりしるを生む装置
- ・アイデアを実現する仕組み...



「箱」がある道

—人とまち、人と道が関わるしかけ—



「箱」がある道

一人とまち、人と道が関わるしかけー

疲れた。
僕は道に座り込んだ。
ずーっと坂道を登っているのにまだぜんぜん着かない。
そんな僕を見て、お父さんは立ち止まった。
怒るでも、あきれるでもなく

お父さんは自分のふるさとのお話を始めた。

僕が生まれる前にお父さんが住んでいた町には
そこら中にハコがあった。
今みたいに疲れたときはハコに座って休んだと。

「あの街には、ミュージアムロードっていう前の坂道があった。
やま側からはまっ直に歩いて
動物園、駅、広場、美術館、道沿いになんともあった。
道はとにかく緑、黄、赤、白、ピンク、オレンジで彩られ
どこからラジオや楽器の音色が聞こえるときやかな場所なんだよ。」



お父さんたちは幼稚園のころ、「箱」のルールを覚えて、そのルールを守るお兄さんやお姉さんを見て、お父さんは自分の持ち物に箱を積りたがっていた。

「箱」
ハコ
僕はまだ「箱」を知らない
お父さんがミュージアムロードを歩いていたとき、お父さんがおじいちゃんに箱を勧めた。

～僕とお父さんとおじいちゃんの物語～



「箱」のルール

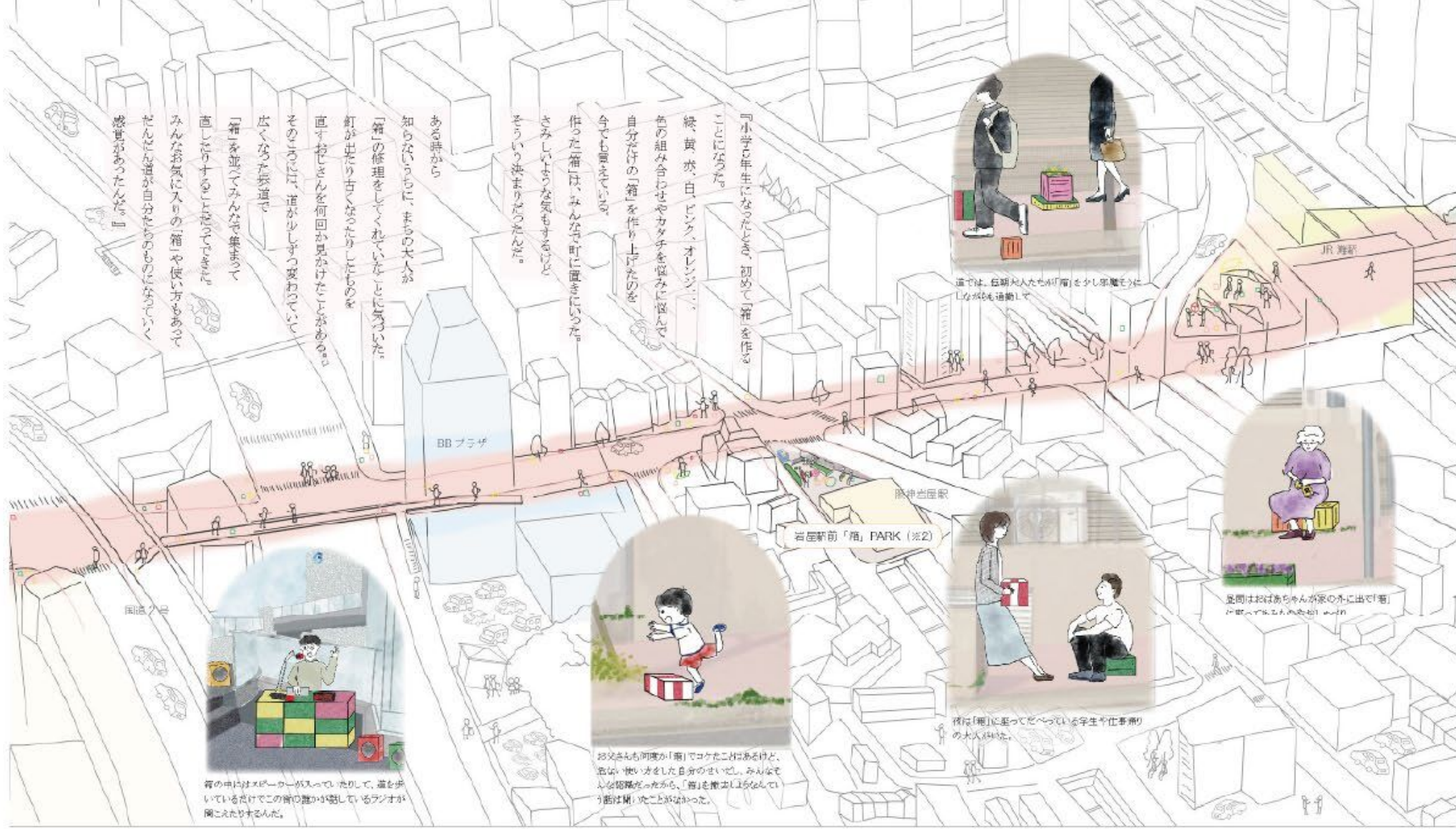
- ① 箱は歩くときの足元をきれいにする。
- ② 歩道の端に置いておく。
- ③ 歩道の端に置いておく。

ZOOロード PARK

お父さんの「箱」のルールは、動物園、駅、広場、美術館、道沿いになんともあった。道はとにかく緑、黄、赤、白、ピンク、オレンジで彩られ、どこからラジオや楽器の音色が聞こえるときやかな場所なんだよ。



- ① 歩道にメリハリをつけて歩く。
- ② 歩道の端に置いておく。
- ③ 歩道の端に置いておく。



ある時が、
知らないうちに、まわりの大人が
「箱」の修理をしてくれていなくなっていた。
町がせり古くなったように感じた。
直す村さんをお回りが見かけたことがあった。
その「直す」直が少しずつ変わって
広くなった街道で。
「箱」を並べてみんなが集まると
直したがる「直す」直がまた
みんなお気に入りの「箱」や使い方もあって
だんだん道が自分だけのものになっていく
練習があったんだ。

『小学で年生になったとき、初めて「箱」を作
った記憶があった。
緑、黄、赤、白、オレンジ、オリーブ……
色の組み合わせやカタチを自由に選んで
自分だけの「箱」を作り上げたのを
今でも覚えている。



道では、毎朝大人たちが「箱」を少し邪魔するに
しながらも通っています。



昼間はおはあちゃんの家の外に出て「箱」
の道へ出てくるんだ。



お父さんも何回か「箱」で遊ぶことがあるけど、
古い「箱」を使った自分のせいで、みんなそ
んなに好きだったから、「箱」を壊さしめてい
う事は無いことになった。



夜は「箱」に基づいて歩いている学生や仕事帰りの
大人が多い。



箱の中にはスピーカーが入ってたりして、道を歩
いているだけでこの音の道が感じられるラジオが
聞こえたりするんだ。

「箱」を作るのはどう?

「作る」は集めるカラだけ
小学で年生以下は大人と一緒に
作ったら「箱の道へ」



「箱」辞典

「箱」
座ったりに机にしたたり、
使い方は無限大



「平たい」箱
座すべったり、上に乗って
自分だけのステーションだ。



「スピーカー」箱
見た目は普通の箱だけど、
内蔵されたスピーカーから、
音楽が聞こえてくる。



「ミニタワー」箱
音が響いてきた箱はミニタワーだ
「箱」の道。



「花箱」箱
花を育てるのに使ったり、
お花を飾るのに使ったり、
お花を育てるのに使ったり、
お花を飾るのに使ったり、



「お花箱」箱
お花を育てるのに使ったり、
お花を飾るのに使ったり、
お花を育てるのに使ったり、
お花を飾るのに使ったり、



「お花箱」箱
お花を育てるのに使ったり、
お花を飾るのに使ったり、
お花を育てるのに使ったり、
お花を飾るのに使ったり、



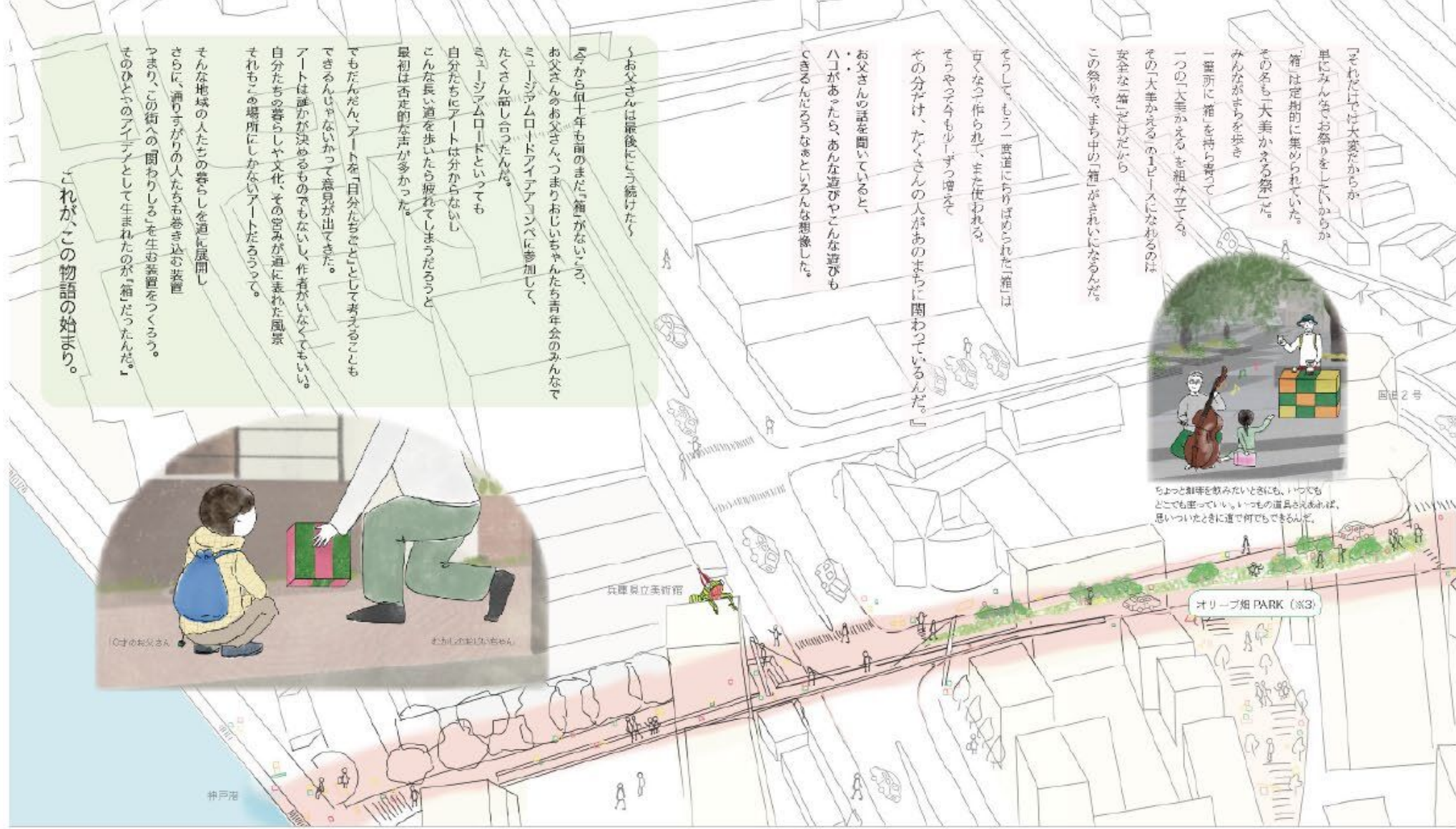
「お花箱」箱
お花を育てるのに使ったり、
お花を飾るのに使ったり、
お花を育てるのに使ったり、
お花を飾るのに使ったり、

岩屋駅前箱 PARK

ミニタワーの中間に位置
する場所であり、すべりや
お花箱、スピーカー、花箱、
お花箱、スピーカー、花箱、
お花箱、スピーカー、花箱、
お花箱、スピーカー、花箱、



- ① 箱の道へ
- ② ミニタワー
- ③ お花箱
- ④ スピーカー
- ⑤ 花箱
- ⑥ 平たい箱
- ⑦ 花箱
- ⑧ 花箱
- ⑨ 花箱
- ⑩ 花箱
- ⑪ 花箱
- ⑫ 花箱
- ⑬ 花箱
- ⑭ 花箱
- ⑮ 花箱
- ⑯ 花箱
- ⑰ 花箱
- ⑱ 花箱
- ⑲ 花箱
- ⑳ 花箱



「それだけでは大変だからか
単にみんなでお祭りをしたいからか
箱は定期的に集められていた。」

その名も「大美かえる祭」だ。
みんながまちを歩き

一箱所に「箱」を持ち歩いて
一つの「大美かえる」を組み立てる。
その「大美かえる」のピースになれるのは
安全な「箱」だけだから

この祭りでは、まち中の「箱」がきれいになるんだ。
そうして、もう一度道にちりばめられた「箱」は
百くなる作られて、また使われる。
そうやって今も少しずつ増えて

その分だけ、たくさんの方があつちのまちに関わっているんだ。」

お父さんの話を聞いてみると、
「ハ」があったら、あんな遊びやこんな遊びも
できるんだらうなあ」といふような想像した。

「お父さんは最後にこう続けた、
『今から何十年も前のまだ「箱」がないころ、
お父さんのお父さん、つまりおじいちゃんたち青年会のみんなで
ミニシアムロードドライブアリアンに参加して、
たくさん話し合ったんだ。
ミニシアムロードって、
自分たちにアートは分らないし
こんな長い道歩いたら疲れてしまうだろうと
最初は否定的な声が多かった。』

でもだんだん、アートを「自分たちごと」として考えることも
できるんじゃないかって意見が出てきた。
アートは誰かが決めるものでもないし、作者がいなくてもいい。
自分たちの暮らしや文化、その営みが道に表れた風景
それもこの場所にしかないアートだろうって。

そんな地域の人たちの暮らしを道に展開し
さらに、通りすがりの人たちも巻き込む装置
つまり、この街への関わりしる「を」を装置をつくるって。
そのひとつのアイデアとして生まれたのが「箱」だったんだ。」

これが、この物語の始まり。



ちよつと劇味を想みだいたいときにも、いつでも
どこでも遊べていい。いつもの道具さえあれば、
思いついたときに道で何でもできるんだ。



10才のお父さん

お父さんのお父さん

「人美かえる祭」とは？



ミニシアムロードを育てて
たためる「パーク」

箱を置いてみよう
まず20個だけ置いてみる。
どんな置き方がいいのか
どんな問題が起きるのか
試すたびに、みんなが
ルールをきめる。

歩道を広げてみよう
毎半年10個ずつ増やして、
みんなが「箱」が置かれたり
歩道が広がったりするのを見て
みんなが「箱」を置いて
道が広がっていく。

パークをつくろう
もともと歩道のりの少い
い道で、実際に歩くと
大にしてみよう。いろいろ
やってみよう。いろいろ
やってみよう。いろいろ
やってみよう。いろいろ

PARKをつくろう
動物園のミニシアム
ムロード、古くから
歩道、公園、公園、公園
PARKをつくろう。

文化をつくろう
十年経てば、道は
十年経てば、道は
十年経てば、道は
十年経てば、道は

オリブ畑 PARK

HAI前の歩道の中央を
オリブ畑にしよう。歩道が
太く、歩道が太く、歩道
太く、歩道が太く、歩道
太く、歩道が太く、歩道
太く、歩道が太く、歩道



①オリブ畑の収穫用にも
②遊んで遊んだり、木陰で休んだり